

分科会 B

主体的・対話的な問題発見と、思考力・判断力・表現力の育成をめざして

コーディネーター： 佐久間茂和（台東区立教育支援館）

コメンテーター： 佐野亮子（東京学芸大）・石原一彦（岐聖大）

芳賀高洋（岐聖大）・・・第2日

この分科会の趣旨

個性化教育のはじまりは、日本の教育が「個性重視の原則」を掲げた1980年代に遡る。

子どもの個性を育てるとはどういうことか、当初より様々な議論や表現はあったが、個性化教育においては、子ども一人ひとりの「持ち味(学習の過程で考慮されるべき個人の特性)」を重視し、子どもが学びの主体となって自己の学習能力を伸ばしていくことを一貫して目指してきた。そして、そのためにどのような授業の実現や学校の在り方が求められるのかを、常に実践を通して考究してきた。

その志と成果は、たとえば、学校施設の在り方が質的充実に向けて変わる時期にオープンスクールという学校の「かたち」を建物と教育活動の両面で具体的に示してきたし、また、教育方法の多様化を実現した様々な授業改善の提案は「個に応じた指導」として現行学習指導要領総則にも反映されている。これらを鑑みると、個性化教育の実現は、時々の教育改革や学習指導要領の実現と軌を一にするものと考えていいだろう。

新学習指導要領の「主体的・対話的で深い学びの実現」は、これまでの経緯や社会的背景を踏まえつつ、子どもの視点に立ち、その学習過程に寄り添いながら、資質・能力の育成に主軸においている。

かつて個性化教育では便宜的に「学力も学習力も身に付ける」と表現していたが、これからは分けることなく「資質・能力の育成」というシンプルで原理的な学力観に基づいて授業の創造ができるようになったといえる。私たちにとっては、これまでの研究蓄積や実践から得た見識や指導技術を足場にしながら、今後もさらなる創意工夫が求められていくことになるだろう。

本分科会では、こうした背景をふまえた上で、個性化教育の実践の中でも特に、学習空間・学習環境と連動した授業改善、ICT環境と指導観の転換、学びの主体性を意図した授業デザイン、対話的な学びによって既有知識を洗練・統合する手立てと工夫、などに焦点を当て、具体的な実践報告や事例の検討を通して、「主体的・対話的で深い学びの実現」をどのようにイメージし、さらなる創意工夫へどのような一手を打つのか、考えてみたいと思う。

2日間にわたるそれぞれの実践報告は、コンテンツ・ベースで見れば個別の具体事例であるが、資質・能力の育成という今日的視点や教師の子ども観や指導観で見れば、通底する目指すべき子どもの学びの姿や、そのための授業の工夫やカリキュラムの創造へとつながる共通の考え方を見いだすことができるのではないかと。

主体的で対話的な問題発見が、子どものみならず、私たち自身においても生じることを期待したい。